



八代目・立石公博会長



に新しい世紀にふさわしい東京雪州会にしたいと念願しております。どうぞ皆様方のご指導、ご支援を偏にお願い申し上げます。

(平成11年11月発行・第27号／東京雪州会・立石公博会長記)

▼昭和四十八年夏、雪州会（大正初頭の創設から昭和五十七年までの名称）の会員相互の結びつきをより一層強めるために、機関誌の発刊が企画され、「雪州会だより」と誌名も決まり、題号を当時の三代会長真鍋儀十翁にご揮毫頂いた。

今、あらためて、創刊号から目を通してみると、往時の諸先輩の方から若い方にいたるまで、誌面に溢れているのはそれぞれのふるさと壱岐に対する思いである。雪州会だよりも第28号を迎えた。今、時代は大変なスピードで大きく変化しようとしている。ふるさと壱岐に遠く住みながら、私達は、壱岐の島の心ゆくまでの発展を願って止まない。と同時に、幼年、青春時代を過ごしたふるさとの美し

い自然の風景がいつまでも変わらずにあつてほしいと思うのも事実である。

世の中がどのように進歩し、変化しようともその根底に流れているのは、人と人のつながりや自然を大切に思う気持ちであろうかと思う。

今後、ふるさと壱岐が一層発展しながら、美しい自然というかけがえない財産も大切にし、育てていただきたいと切に願うものである。

(平成12年11月発行・第28号／東京雪州会・立石公博会長記)

▼このたびの東京雪州会総会は21世紀冒頭の総会でもあり、殊のほか感慨深いものがあります。私たち東京を始め関東に在住する壱岐島出身者が一堂に集い、遠く離れた故郷に想いを馳せ、会員相互の親睦を図る。これこそが東京雪州会員の喜びであり、当会の最大の目的でもあります。この積み重ねが80有余年にわたる当会の歴史と伝統を育んできたといえましょう。

その意味でも、関東地区壱岐出身者でまだ当会に加入されておられない老若男女、各界各層の幅広い方々の参加を期待している次第です。今年度は壱岐高東京同窓会や壱岐商高同窓会（関東地区）、さらには各地区団体などのご協力も得て、会員増強と、総会への積極参加を呼びかけて参りました。

その効果もあり、新規の多くの仲間を迎えることができました。

今後更に会員皆様のご協力は勿論、各団体相互の連携を密にしながら「魅力ある東京雪州会」の運営を目指していくことが大事だと思っております。皆様の一層のご協力をお願いいたします。

一方、故郷壱岐におきましては、町村合併の動きや地域の活性化を目指した各種取り組みが積極的に展開されており、心強い限りであります。故郷の益々の発展を祈念いたしております。

(平成13年11月発行・第29号／東京雪州会・立石公博会長記)